# 陰陽鉄学園 ～二つの恋と交差する因果～

Y太郎

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

多種多様な種族の集うニコニコ県ネ実市。

その地にはあらゆる者を受け入れる学園があった。

かの学園の名は陰陽鉄学園。

これは陰陽鉄学園で巻き起こる、非日常のような日常の物語。

そして、どこにでもあるかもしれない、少年少女の青春の物語である…予定。

※この小説は【有頂天で学園モノ　Ｗｉｋｉ】を参照しつつ執筆しております。『こんなの〇〇じゃねぇ!!』というようなキャラが多数出現するため、その手の話に耐性の無い方は、無理せずブラウザバックすることを推奨します。また、あくまでも参照する程

度にとどめているので、場合により完全オリジナル設定が飛び出てくることも有り得ますので、閲覧の際はあらかじめご了承ください。

※作者の処女作につき、誤字脱字や使えてないのがバレバレのブロント語スキル、回収されないまま放置されるフラグ等がごろごろしているかも知れません。ある程度は目をつぶっていただきつつ、誤字脱字は報告していただけるとありがたいです。

※行き当たりばったりもいいところの気まぐれ投稿になる未来しか（作者に）見えないので気長にお待ちください。

# 目次

プロローグ ―― 1
登場人物紹介 ―― 6
1年目春
第1話　出会い ―― 11
第2話　入学式 ―― 15
第3話　生徒会 ―― 21
第4話　昼休み ―― 28
第5話　花さか橋姫　前編 34
第6話　花さか橋姫　中編 43
第7話　花さか橋姫　中編2 51

# プロローグ

ーねぇ、母様。
ーどうしたの？
ー高校なんだけどさ…ここに行きたいんだ。いいかな？
ー…えぇ。あなたがそうしたいのなら、何も言わないわ。
ーそうか…お前ももう高校生なんだな…。
ー父さんを言いくるめるのは手伝ってあげるから、他のことは自分でやりなさい。それが出来るなら大丈夫よ。
ー俺が出来なかったこと、好きなだけやってこい。思う存分…楽しんでこいよ、高校生活。
ーありがとう、兄様、母様。

『報告します。コード４３Ｎ―５７６ＳＡは現在、Ｄ３７世界に逃走中。』

「Ｄ３７って確か…」
「厄介なところに逃げ込まれたわね…」
「どうする？」
「どうもこうもないわよ…急いで捕まえなきゃ、時空の歪みが広がってしまうわ。…頼める？」
「しょうがねぇなぁ…あんま気乗りしないけど…」
「…まだ『あの事』が気になる？」
「…」
「…なんでもいいわ、とにかく急いでちょうだい。野放しにしておくわけにはいかないんだから」
「はぁ…わかったわかった。さっさと行ってとっちめりゃいいんだろ？」
「ついでに色々学んできたら？学校に紛れこめばいいカモフラージュになるわよ？」
「…」ギロリ
「ハイハイわかったわかった、好きなようにやんなさいよもう」
「…行ってくる」
「行ってらっしゃい」
「…ふぅ、相変わらず面倒な弟だこと。さて…」

『本部からコード４３Ｎ―５７６ＳＡ対応班へ、アサヒを向かわせた。サポートに回れ。繰り返す、アサヒのサポートに回れ。』
『了解』

～ニコニコ県ネ実市　某所～
???「はぁ…かったりぃ」
???「なーに沈んでんのノブオ、ほら元気出して！これから入学式でしょ？」
ノブオ「朝からうるせぇんだよ黙ってろ!!」
???「うわーんスーさーんノブオがいじめるー（棒）」
スーさん「俺のメディを泣かせるとはいい度胸じゃないかブラザー？」
ノブオ「っつーかなんでオメーらまで着いてくんだよ…」
メディ「だって幼稚園こっちなんだもーん」
スーさん「だもーん」
ノブオ「…」イラッ
???「嫌なら他の道通ってきゃいいじゃねーか、知らない道なんざそうそうないだろう

？」

ノブオ「なんでわざわざ家出てまっすぐ通りを歩くだけで着くところに遠回りして行かなきゃなんねーんだよ、効率悪いったらありゃしねぇ」

???「ま、お前らしいっちゃお前らしいがな」

ノブオ「…うるせぇ」

スーさん「おっブラザーツンデレ？」

ノブオ「なわきゃねーだろデタラメ言ってんじゃねぇ」

メディ「スーさんツンデレって何？」

スーさん「男のロマン」

???「間違っちゃないが…おっと、メディ、スー、着いたぞ」

メディ「あーホントだー♪じゃーねーノブオ！」

スーさん「さらばマイブラザー」

ノブオ「…」イライラ

???「まぁそう怒んなって。ほら行ってこい」

ノブオ「…はぁ」

２００⑨年４月１日

まさか高校生活があんなに濃いものになるなんて、あの時は誰も考えちゃいなかった…。

# 登場人物紹介

白金（しろかね）　大雅（たいが）

性別：男
能力：無し
種族：ヒューム
属性：風
ジョブ：戦士

本作の主人公その1。
陰陽鉄学園に通うため、隣町から引っ越してきた。
お人好しで社交家、家事万能だが初対面相手だと少し疑り深い。
「親に習ったから」という理由で大概のことをやってのけるが、1人でやたらと背負い込む癖がある。しかも末期レベルの重症。
特に剣が得意で、手持ちの剣は曰く小学校の入学記念に親に譲り受けたものだそう。
学園近くのアパート［ネジツ荘］に一人暮らししている。

認識阻害の影響で滅多に他人に認知されない餡刻をまるで見えるのが当たり前と言わんばかりに視認できる。
所持スペルカード
剣撃「衝突剣」
・相手に体当たりし、怯んだところをすかさず切りつける。
惑剣「かすみ二段」
・相手を切りつけるように剣を振り、体勢が崩れたところを切りつける。1発めは惑わすために振るので滅多に当たらない。
剣符「白光一閃」
・剣に力と霊力を込め、駆け抜けるように切りつける技。

次元（じげん）　朝日（あさひ）
性別：男
能力：次元を越える程度の能力
種族：???（ヒュームっぽい）
属性：陽
ジョブ：竜騎士／赤魔道士

本作の主人公その2。
この世界の住人ではなく、別次元から来た存在。
種族不明なのは単純にこの世界の種族分類のいずれにも当てはまらないせいであり、れっきとした人間である。
普段はお調子者のムードメーカーだが、いざ戦闘になると途端に冷静沈着になる。別に二重人格ではないが。
地理歴史以外は学年トップレベルだが、どういうわけが芸術的センスが微塵も無いうえに自他ともに認める絶望的なレベルの音痴。でも楽器はできる。
どれくらい音痴かと言うと歌どころか言語としてすら認知出来ないくらいヤバい。
何か目的があってこの世界に来たようで、ちょくちょく是非曲直庁に入り浸っては情報集めをしている。（学園側はそのことを知っている）
何やら過去にトラウマがあるらしく、あまり親密な関係を作りたがらない。けど人との関わりは積極的に持とうとするよくわかんない奴。
地底温泉街の入口付近に長年放置されていた空き家を拠点にしている。
所持スペルカード
突符「チャージスラスト」

・槍で敵を思い切り貫く技。
払符「受け流しの型」
・相手の攻撃を逸らして体勢を崩させる。
槍符「ダブルエナジースラスト」
・ランダムで選ばれた2属性を槍に宿して放つ二連撃。

水橋（みずはし）　パルスィ
本作の主人公その3兼ヒロイン枠その1。
生徒会書記兼会計の割と忙しそうな人。鬼（橋姫）だけど。
料理は錬金術（直訳）な子。
地底温泉街の入口の橋を渡ってすぐのところに住んでいる。

古明地（こめいじ）　さとり
本作の主人公その4兼ヒロイン枠その2。
飼育委員長だが不登校児でもある。なんで委員長やれるの
自宅は地底温泉街の名物温泉宿［地霊殿］。

笠松(かさまつ)　信夫(のぶお)

本作の主人公その5。

みんな大好き汚い忍者。そして生徒会副会長。

主人公にしてるけど出番あんま無いよ？

自宅は学園正門から伸びる商店街の反対側に門を構える練り物屋［練(れん)・笠松(かさまつ)］。

# 1年目春
# 第1話　　出会い

ここはニコニコ県ネ実市。人間・妖怪・神様・幽霊・獣…と、挙げればキリがないくらい多種多様な輩が住まう大都市であるこの町には、初等部から高等部までの一貫教育（途中編入有り）を行う私立学園が存在する。その名も《陰陽鉄学園》。ネ実市どころかニコニコ県に住む人々なら知らない者はいないくらいの超有名高校…中学校？小学校？なんて言うんだろ？…まいっか、とにかくそんな施設がある。

あ、まだ名前を言ってなかったっけ？

俺は白金大雅。今日からこの陰陽鉄学園の高等部に編入するヒュームだ。

ここには越してきたばかりだから友人関係も何もあったもんじゃないけど、俺は気にしない。友達がいないなら作ればいいじゃないか。

…作者の目が淀んだ気がするがメタはいかんな、関わらんとこ。

まぁそんなこんなでいざ学園へ。

今住んでるアパートから学園へは、目の前の大通りを道なりに歩くだけで着く。この距離なら自転車要らないな。せっかく持ってきたけど、出番は休日までお預けかな？

…とか言ってる間に到着。いやぁ騒がしっ。誰だろうね初等部から高等部まで入学式同じ日にやろうとしてる人は。人じゃないかもしれないけど。

さぁて何組かな～？

汚忍ｓｉｄｅ

長ったらしい階段を延々と登り続けること５分。目の前の教室のドアを開ける。教室が階段の目の前にあるのと、座席が廊下寄りなのが救いか。この学校いい加減エレベーターかエスカレーターくらい付けてもいいんじゃないかと学年が上がるたびに思う。授業受けるためになんで６階まで来なきゃならないんだと心の奥底で愚痴る。そんなことしたって何も変わんねぇけど他にやることも大してない。せいぜい紙兵を作り置くくらいだ。ブロントのやつのクラスは知っているが、高校生活初日からそんな気力は持ち合わせちゃいない。というか、どうせあいつのことだから屋上辺りでサボってるに違いない。居心地が悪くないのは確かだが俺は四季会長に目をつけられている。ついでに言えば生徒会副会長だから式中にやることもあるにはあるからサボれやしない。

「はぁ…めんどくせぇ」

だから今の俺にはこうして溜息をつくくらいしかできない。

「えーっと座席は…あっちか」
そう言いながらまた１人教室に入ってくる。
（…見ない顔だな、隣町のヤツか？）
同学年のやつを全員知ってるかと言われればそうではないが、記憶力には自信があるし、何よりあれだけのスペックなら噂の一つや二つあっても可笑しくはない。だが俺の隣に座った「ソイツ」は俺の覚えている限りでは全く知らないやつだった。
（ま、関わんなきゃ…）「初めまして、俺は白金大雅。よろしくな！」
…どうやら面倒なことになりそうだ…どうしてこうなった…。

大雅ｓｉｄｅ

…こ、この学校…広い…。絶対１ヶ月は路頭に迷うぞこりゃ…。そもそも８階建てってこの校舎可笑しいだろ…。何とか教室まで辿り着けたけど。
「えーっと座席は…」
１５番は…ド真ん中？
「あっちか」
授業受けやすいだろうからいいか。…おっ、隣いるじゃん。挨拶しとこ。
「初めまして、俺は白金大雅。よろしくな！」

挨拶は大事だもんな…あれ？不機嫌そうだな…なんかミスったか？

「…はぁ、汚い忍者だ」

「忍者ね。これからよろしく！」

「…おう」

なんだろう、なんか友達少なそうな人だなぁ…まぁいいや、俺が広げてきゃ良いもんな！

???ｓｉｄｅ

面倒だなぁ…俺は早くヤツをとっちめねぇとなんねぇってのにあの堅物軍団と来たら…何が『学校はちゃんと通うべきだ』だよ。テメェらなんぞに頭脳戦で負けやしねぇよ。ったく…。

だが陰陽鉄学園か…ざっと２００００人が集まるとなりゃかくれんぼには悪くない場所ってのも納得だな。

事実…今俺がこの場で迷ってるわけだし。

「ここどこだよ…」

こんなんでやってけるのか？俺…。

# 第２話　　入学式

大雅ｓｉｄｅ

『只今より、第４９回陰陽鉄学園高等部入学式を開会いたします。』
「(やっと始まったな…)」
「(予想はしてたが入場だけで一時間近くかかるとはな…)」
現在時刻午前１０時、やっと入学式です。
あ、多分みんな隣のこいつのこと気になるよね？
こいつについては１時間くらい前になるんだけど…

～教室～
「やっと着いた…どういう構造してんだこの学校は…」
「気持ちはわかるがまず席につけ。時間が押してるんだ」
「あっ、すいません」
…今ほとんどの人がそうだろうなって思ったんじゃないかな…？
「初見でなくとも迷うようなところだ、あれが普通だろ」

「笠松さん心読みましたか？」
「その呼び方やめろ。あと読んでないから」
「ふーん」
　あっぁいつ俺の前の席か。なら仲良くしとくべきだな、うん。
「このままここで野垂れ死にするかと思った…」
「災難だったな」
「全くだ…ところでどちら様で？」
「汚いｎ「俺白金大雅、よろしくな！」…」
「お、おう…よろしく…（忍者可哀想…）」
「で、君は？」
「あ、あぁ、次元朝日だ」
「朝日ね、よろしく！」
（（慣れるのはぇぇな!?））
　～回想終わり～

　…ってな感じで要は友人である。
　…今考えてみたら、よく迷わなかったな俺。

「（どこ行ってもお偉いさんの長話はお決まりか…）」
「（暇だな…）」
「（話聞かないんですね…）」
「（どうせ聞いたところで何の役にも立たないのが普通だからな…）」
「（言い切りますか…）」
「（実際役に立った記憶が無い）」
「（そもそも理事長が欠席する入学式って可笑しいだろ…）」
「（「（確かに）」）」
　そう、理事長が居ないのだ。他の入学式に出てるとかそんなんじゃなくて。
「（行事サボっていいよって言ってるようなもんじゃないか…）」
「（実際何人かサボってそうだがな）」
「（私もそう思います）」
『続きまして、校歌斉唱』
「（そう言えばここの校歌ってどんなのだろう？）」
「（歌詞見ても何のことやら…）」
「（それはですね…聞けばわかりますよ）」
「（ほう…）」

あっ起立じゃん。俺らも歌うのか？

『新1年生の皆さんは、歌える範囲で歌ってください』

「えっ」

「（歌いきれる人がほとんどいないんですよ…校歌）」

「（なんで校歌にしたし）」

～前奏～

「校歌…？」

「なんか思ってたのと違う」

ヘエーエ　エーエエエー

エーエエー　ウーウォーオオオォー

ララララ　ラァーアーアーアー

「「!?!?」」

ナァオオオオ　オオオオオ

サウエエエアアアアア　アアアアア　アアアアア　アアアアア

イエエエエエエエエウウアァ…

「「えっえっ」」

ヘェーラロロォールノォーノナーァオオォー

アノノアイノノォオオオォーヤ
ラロラロラロリィラロローー
ラロラロラロリィラロ
ヒィーィジヤロラルリーロロローー
「…」
「こういうことです」
…これ歌？

結局その後、特に何もなく教室に戻ってきたのだった。どっとはらい。

「ところで君の名前は？」
「知らなかったんかい!?」
「なんで聞かれなかったんでしょうか…？」

# 第３話　　生徒会

大雅ｓｉｄｅ

「…でここが学生寮。女子寮に男子が特攻すると防犯用オートマトンが殺しにかかってくるから不用意に近づくなよ？」

「こえーよ女子寮」

「とまぁこんな感じだ。わかったか？」

「「さっぱりわからん」」

「でしょうね」

「…だよなぁ…。これ以上どう説明しようか…」

笠松と古明地さん（入学式で一緒に会話してた子）に頼んで敷地の説明をしてもらったんだけどここなんてダンジョン？

ここまでの説明でとりあえず職員室がやたら広いのと学生寮が危険なのは理解したけど…。

「口頭で済まそうとするからわかりにくいんじゃない、効率厨の割には随分頭が回ってないようね」

「あ？」

朝日ｓｉｄｅ

話聞いてたらなんか辛辣な横槍が入ってきた。痛そう（小並感）。

…それはそうと今の槍はどこから…？

「あんたそれでも生徒会副会長？」

「うるせぇなぁ…案内できるほど暇じゃねぇんだよ。文句あんならお前がやれ水橋」

「そうやって仕事を押し付ける…妬ましい」

「なになに…『早く帰ってメメ子達の相手しねぇと…』ですか。シスコンですねわかります」

「俺はシスコンじゃねぇ!!」

「はいはいシスコンシスコン（笑）」

「…」イラッ

…ついていけん。

「どうしてこうなった…」

…あれ？大雅の反応がない…。

「大雅ー？どうしたー？」

…返事が無い。ただのしかばねのようだ。
…じゃなくて！
「おーい？大雅さーん？もどってこーい？」
こいつさっきから固まったまま動かないんだが…。
「ってかいつまでのけものなんだ俺ら…」

大雅ｓｉｄｅ

…
……
……はっ!?俺は一体…。
…ってそんな茶番はどうだっていいんだ、重要じゃない。
一目惚れってこんな感じなのかな…？（思考停止）

少年少女移動中…

朝日ｓｉｄｅ

やぁやぁ皆お待たせ、朝日さんだ。

あの口論からかれこれ４時間、我々は現在本棟の生徒会室に来ている。
これまでたっぷり2時間半ほど見学して回ったんだが（３０分弱は忍者と水橋ってやつの口論）、訳分からんねここ。今まで見てきた建造物の中でダントツで構造覚えらんないよ。そりゃ在校生が迷うに決まってるわ。
んでなんで今生徒会室にいるかって言うと…。
「大体あなたは何でもかんでもサボろうとしすぎなのです！生徒会という立場にいる以上、ほかの生徒達の見本となればならないのが我々生徒会役員なのですよ!?わかっているんですか!?」
「へいへい」
「話を聞かずに生返事とはいい度胸ですね…!?」
「なんで私まで巻き込まれるのよ…妬ましい」
…ってな感じで生徒会長様がお説教中なわけですよ。一応こっちも無理言って案内してもらったから助け舟は出してるはずなんだが…
「…終わんないね」
「助け舟仕事してくれ…」
「諦めが肝心だと思いますよ?」
「とは言ってもなぁ…」

なんだかんだ1時間経ってるわけで。さすがに無視するわけにもいかないじゃん？
「会長…、お気持ちはわかりますがお客様の前ですよ？」
「…むぅ、仕方ありませんね…このようなことで待たせても良くありませんし、今日のところはこの位にしておきましょう」
続くのかこれ。
「さて、先程は随分と見苦しいところをお見せしました。生徒会室へようこそ。ご要件は何でしょう？」
「あ、いやー大したことじゃないんです」
「編入したばかりなので校内見学をと」
「それで忍者さんを引っ張っていったわけでして…」
「そうでしたか。改めまして、生徒会長の四季映姫です」
「会計の寅丸星です」
「何か困ったことがあれば、何時でもお立ち寄りください。出来る限りのお力添えをさせていただきます」
「あ、ありがとうございます」
「それでは私はこれで。さて笠松君に水橋さん、先程の続きですが…」
「やるのか…」

「あはは…会長は以前の笠松さんの悪評を聞いて、あくどいことが出来ないようにと無理やり生徒会に引き込みましたから…」
「権力の乱用だ…」
現代社会の縮図の一部を見た気がした。

大雅ｓｉｄｅ

帰り道、たまたま3人とも同じ方向だったので一緒に帰ることに。
「濃かったなー今日」
「1日で3日分のツッコミした気分」
「基準がわかりません」
初日でこれだとこの先どんな日常になることやら…。
楽しみだけどね。
「あっ、俺ここだから」
「ネジツ荘でしたか。それでは」
「またなー」
明日は何が起こるやら…。

あ、次の登校日来週じゃん。

# 第４話　昼休み

大雅ｓｉｄｅ

「「通り魔事件？」」
「あぁ、どうもここのところ被害にあいかかっている人が多いらしい」
昼休み、いつもの（まだ学校始まって１週間だけど）６人で駄弁ってたら、朝日がそんな話を切り出してきた。
「物騒な話だなぁ…」
「親父も言ってたなぁ…メメ子達に気を配っとけって。口酸っぱく言ってくるから何かと思ったが、そういう事だったか…」
「ん？あいかかっている…ってことは？」
「そう、まだとりたてて騒ぐほどの被害は出てないんだ」
「じゃあそこまで気にすることないわね」
「そうですね」
「まぁそんなことよりさ…」
「「「？」」」

「お前ら学校来いよ」
「やだ」
「おい」
「…」
「さとりもなんか言いなさいよ…」
「ノートありがとうございます？」
「違う、そうじゃない」
　朝日と古明地さんが先週１回も学校に来てないのである。しかも病欠でもなく。
　古明地さんに至っては毎日「さとり様今日〝も〟休みでーす！」と元気な欠席連絡が来るし。
　あのこなんて名前だっけ…あの左腕にやたらでかい棒（笠松曰く「制御棒」だそう）くっつけた子。名前忘れちった。まいっか、今は関係ないし。
「進級出来なくなっても知らんぞ…？」
「私は別になんとでもなるので」
「進級くらい余裕余裕（笑）」
「フラグか」「フラグね」「フラグだなｗ」「フラグ建て乙」
「お前ら…」

「容赦ないですね…」
「いや普通だろ」
「後で涙目になってるやつの発言じゃない」
「現実を見ろよｗｗｗ」
「言っとくけど古明地さんもだからね？」
「えっ」
「えっ」
「それはそうとカギ括弧多くねぇか？」
「そういえばそうだな」
「言われてみれば」
「えっ？」
「「えっ」」
「そこに居ますよ？」
「居るよね？」
「「えっえっ」」
「だから言ったじゃねぇか…ｗ」
なんで誰も気づかないの？ずっと一緒に話してたのに…あ、古明地さんは気づいてた

か。
「…もしかして餡刻か？」
「もしかしてってなんだよ、どっからどう見たって餡刻じゃん」
「…あー…言われてみればなんかいるようないないような」
「いやいるからな？ｗ」
「!?」
「（ ▪ д▪）＜キエェェェェェェェシャベッｔ「朝日煩い」（ ・ω・ ）」
「…だろうと思ったよｗ（泣）」
…あいつもあいつで大変なんだな。
あの文面に草撒き散らしてるのは餡刻っつって、俺の友達兼ご近所さん。いやーまさか真下に住んでるなんてそうそう考えないよ。
…っつーか俺ちゃんと〝６人で〟っつったじゃん何聞いてたのこいつら…あっ言ってないか。言ってないな。
「…んで、どうする？」
「ちゃんと授業を受けなさい」
「いや俺の成績じゃなくて通り魔事件のほう」
「放置が一番だろ。そういうのは天狗ポリスにでも任しときゃいいじゃねぇか」

「…そうか」

…この時はみんな、あんな大事になるなんて予想してなかったと思う。まさか、ねぇ…？

「次体育じゃね？ｗ」

「やべぇ！５限始まるぞ!?」

「嘘でしょ!?」

「間に合うか!?」

「無理だろこれ!?」

「私見学なので～」

# 第5話　花さか橋姫　前編

大雅ｓｉｄｅ

朝日が通り魔事件の話をした日、ついに陰陽鉄学園内でも被害者が出始めた。といっても、知ったのは今日なんだけどさ。

「…そんなことが…」

「うん…。でもほら、かすり傷だから。大丈夫大丈夫」

「そうやって能天気でいられるなら問題なさそうね…妬ましい」

被害者は同じクラスのミスティア・ローレライ。なんでも、買い物帰りに近道をしようと路地裏に入った時に出くわしたらしい。で…。

「「白い犬（ですか）？」」

「そう、その子に助けてもらってね…。まぁ、逃げる途中で擦りむいちゃったんだけど」

「怪我と事件大して関係ねぇ…」

「あはは…」

「…」

「？パルスィさんどうかしました？」

「…え？あぁ、何でもないわよ」
「…そうですか」
　あ、ちなみに隣で身を乗り出しながらミスティアに取材してるのは隣のクラスの射命丸文さんだそうで。なんか名刺もらった。
　新聞部ねぇ…あんま深入りしたくないな…。
「しかし…また白い犬ですか」
「「また？」」
「えぇ。これまでの被害者ぜいいん…少なくとも私が取材した限りでは皆さん、その白い犬に助けられてるそうなんですよ」
「やっぱそうか」
　後ろから声がしたので振り返ると、大荷物を抱えた朝日と古明地さんが教室に入ってくるところだった。２人とも今日日直なんだよね。
「あ、朝日も古明地さんもおかえり。それはそうとやっぱって？」
「今朝交番で聞いてきたんだが、一連の事件の被害者全員、白い犬に助けられたって口を揃えて言ってるらしいぜ？」
「なるほど…私の取材とも噛み合いますね」
「…こうしてみると俄然気になってくるな」

「どうする？今日あたり調べてみるか？」
「おう」
「気をつけてくださいね。何があるかわかりませんし」
「私は飼育委員の当番で同行できませんが…返り討ちにされないようにしてくださいね？」
「わぁーってるっての」
「怪しいから言ってるんじゃないですか」
「信用ねぇな俺…」
「…」
「パルスィ？」
「…何でもないわよ」
「…そうか」
「と言うかいつの間に名前呼びになってるのよ…許可した覚え無いんだけど」
「ダメだった？」
「…好きにすれば…妬ましい」
「お？これは特ダネの予感…」
「…」キッ

「おぉ、こわいこわい。こりゃ触らぬ神に祟りなしですねぇ」
「それはそうと俺ら次の授業世界史なんだが、お前ここに居て大丈「私ちょっと授業系の仕事があるのでこれで」ササーッ
「相変わらず速いこって」
「初対面でしょ…」
「おうよその通り！」
(((めんどくせぇ…)))
「…ラオグリム先生ってそんな怖いのかな？」
「いえ、陰陽鉄学園いち優しい先生とまことしやかに噂されるくらい怒らない先生だそうですよ？」
「実際怒ってるところを見たことないわ」
「ウルリッヒ先生でも来ると思ってたんじゃね？」
「あぁ…あの人の授業けっこう精神的にくるからな」
「まぁね…」
…とまぁそんな茶番は置いといて、放課後俺と朝日で通り魔探しをすることになった。

～放課後～

「…んで、何処探そうか？」

「路地裏を虱潰しに、でどう？」

「それしか情報無いもんな。そうしようか」

ってことでレッツ路地裏漁り。してたら…

「兄さん兄さん、おれについてきてくらさい」

…なんか急に話しかけられた。犬に。リードを付けた犬に。

「…どうする？」

「当てもないし…ついてってみっか」

ってことでその白い犬について行くと、少し奥に行ったところにサラリーマンっぽい人がいた。ただ、ものすごく怪しいオーラ撒き散らしてるけど。特にあの日本刀っぽいやつ。オーラで形がはっきりしないなんて相当やばそうだ。

…なんて言ってたらあいつ逃げ出しやがった!?でも白い犬がいつの間にか後ろをとっていたようで、リーマンは舌打ちしてた。

「…何者だ？ただの人間…というわけじゃなさそうだが」

「我ノ名ハ『エキビョウ』。…妖怪ダ。」

「妖怪ねぇ…何が目的？」

「人妖共存を訴えるこのネ実市で通り魔なんて、なんの意味が…」
「妖怪ハ…影ニ生キル存在ダ」
「は？」
「シカシ、世ハ光で溢レタ。我ラノ生キル地ハ失ワレタノダ」
「話聞いてたか？この町は人妖共存だｔ「嘘ヲ言ウナッ!!」
……！」
「コノ町ニイルノハ人間ト…ソシテ、妖怪ノ誇リヲ捨テ人間ト共ニ生キル弱者ノミダ」
「弱者…!?」
「我ハ妖怪の国ヲ作ル！人間ナドトノ共存ヲ選んだ弱者共デハナク、純粋ナ妖怪ノ国ヲナ!!」
エキビョウはそう告げると、手元の刀でいきなり斬りかかってきた！
「…ちっ！面倒な…！」
「やるっきゃねぇか…！」

…その後交戦すること１０分。戦況は…
「くっ…!?」
「まるで効いちゃいねぇ…!?」

「フハハハ…コレガ本来ノ妖怪ノ力！貴様ノ知ルヨウナ軟弱妖怪トハ訳ガ違ウノダ！」
…完全に防戦一方だった。なにせこちらの攻撃が全く通用しないのだ。ただただこちらの体力だけが一方的に削られていき…
「なっ!?」
「トドメダ…」
「大雅!!」
足を取られた！不味い…が、体勢を崩され防御できない…！
「死ネ」
エキビョウは懐の小刀を妖力で飛ばし…

——ザシュッ！

「…え？」
「なっ…!?」
「チッ…邪魔ガ入ッタカ…」

俺に向かって飛ばされた小刀は、確かに致命的な傷を与えた。ただし…あの犬に、だが。
「お前…！」
「ダガ２度目ハ…」
エキビョウは呆然とする大雅に再び小刀を向け…
「『グリーンアイドモンスター』!!」
「『八之太刀・月光』!!」
「ヌッ？」
…放たれることは無かった。
乱入してきたパルスィと謎のヤグードによりエキビョウの注意が逸らされたのだ。
「天狗ポリスでござる！そこを動くでない！」
「分ガ悪イワ…」
「！逃がすかッ!!」
状況を不利と判断したのか、エキビョウはその場から逃げ出し、我に返った朝日がそれを追う。
「待て…！」

「俺は大丈夫ですから、早くヤツを！」
「…承知！」
俺たちを見て躊躇していたヤグードも、俺の言葉に頷き朝日とエキビョウを追った。
「その子…」
パルスィは全身を貫かれて息も絶え絶えな白い犬に歩み寄り、抱きかかえた。
「あぁ、こいつは俺の恩犬で…」
「シロ…？」
「…え？」
「…お前が、こいつを守ったんだ？偉いね…」
「…ワン」
その白い犬…シロは、そう小さく鳴いたっきり…事切れた。
「シロ…？シロ、シロ！…う、ううっ…」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ…！」

# 第６話　花さか橋姫　中編

大雅ｓｉｄｅ

「…すまん、取り逃がした」

「彼奴は途中で手にした刀で我が身を貫き、息絶えた。恐らく、あの刀こそ奴の本体であろう。拙者としたことが、面目無い…」

「そうでしたか…」

あれから１０分、エキビョウを追っていた朝日とヤグード―ゲッショーという名らしい―が戻ってきた。彼らの話が済んでもなおパルスィは泣き続けていたが、その場にいた誰１人として彼女を慰める術を知らなかった…。

「シロがね…喋ったのよ」

通り魔事件の被害を未然に防いでくれた功績もあり、シロはゲッショーさんの勤務する交番の敷地内で埋葬されることとなった。４りで簡素な墓を建て冥福を祈った後、パルスィはぽつぽつと話してくれた。

ある日突然、シロが話すようになったこと。

『ご主人ご主人、おれに手綱をつけてくらさい』と、しきりに散歩に行きたがるようになったこと。

散歩に出るたび、必ずパルスィの手を離れて、例の通り魔を退治する活躍を何度もしていたこと。

「危険だというのはわかっていたし、何度も言ったわ。でも、あの子は絶対に助けたいって…」

「助けたい、か…」

「シロ殿は獣特有の超感覚を備えていたのでござろうか…」

「動物の中には、災害なんかの危険を察知する能力があるって聞いたことがある。あいつもそれなのかもな…」

「この辺じゃ人語を解する動物がいるのは不思議でもなんでもないからな…ありえない話じゃない」

「…ゲッショーさん」

「何か用でござろうか？」

「必ず…アイツを」

「…承り申した」

～翌日～

「…とは言っても」

「見つけるのはどうとでもなるが、倒すとなるとな…」

昨日の報告も兼ね、古明地さんや餡刻達も混ぜて今後の相談をしていた。が…、

「…なるほど、攻撃が入らない、ですか…確かにまずいですね」

「そんな強いのか？」

「ジョブアビリティもスペルカードもかすり傷すらつけらんなかった」

「それも真っ向から防御せずに、だ」

「…マジかｗ」

「お前らが弱いんじゃねーの？」

「それは無かろう」

と、突然横槍が入ってきた。

「ザイド先生？」

会話に割って入ったのは、俺達１―２の担任でもあるザイド先生だった。

「その心は？」

「少なくとも白金は、私の猛攻に５分耐えた耐久力・回避力と、餡刻特製のラストスペル

練習用の的に通常攻撃でヒビを入れられるだけの攻撃力はある。餡刻はこの手のものは大概ＨＱ品が作れるだけのスキルがあるから、ちょくちょく新しく作ってるのだが…」

「…チートか？」

「一点突破しただけだし、５時間かけてヒビ入れるのが限界だから言う程でもないよ」

「どちらかと言えば、５時間も続いた方がすごいと思いますが…」

「よくやるよ…ほんと」

「？普通じゃね？」

「「「普通じゃねー（（ない））から言ってんだよ（言ってるんです）（言っておるのだ）…（ｗ）」」」」」

「えぇ…」

　そんなに変かな…？やろうと思えば半日くらい余裕だと思うけどなー。

「それが正常ならこの世界に平常な人がほとんど居なくなります」

「そうかな…？」

「もはや狂気の沙汰だよ」

「同じ人間とは思えねぇ…ｗ」

「お前妖怪だったか？」

「もう少し常識というものをだな…」
…ひどい言われようだ。悲しきかな味方がいねぇ。

～放課後～
結局、朝日と古明地さんが中有通り経由で西側をまわり妖怪の山へ向かうルート、俺と餡刻が東の地底温泉街方面経由で海水浴場方面へ向かうルートを捜索することになった。のだが…
「さぁ、どこから探してまわりましょうか？」
「パ、パルスィ？」
「休んでたんじゃねぇのかよｗｗｗ」
正門前にパルスィがいた。
「何ボケっとしてんのよ。通り魔の調査、やるんでしょ？私もついて行くから。協力者は多いに越したことはないでしょ？」
「お、おう…ｗ」
「そりゃそうだが…」
「ほら行くわよ、絶対にシロの敵を取るんだから」
「あ、あぁ…」「…頑張れｗ」

捜索メンバーにパルスィが加わった瞬間だった。
「…で？どこ探すの？」
「あっちの方だ。商店街は昨日捜索したからな…」
…結果だけ言うと、特に何の収穫もなかったのだが。

朝日ｓｉｄｅ

「…中有通りは異常なし、っと…」
「…なかなか尻尾を掴ませませんね」
「うーむ手強い」
大雅達と別れて西側を捜索するも、成果は芳しくない。強いていえば…
「路地裏どんだけあると思ってんのよあなた達…」
「虱潰しも限度があるぞ…？」
誰かの式神らしい（自称なので定かでない）妖怪…というか妖獣２匹が捜索の手伝いをしてくれるってことくらいだが。ちなみにさっきそこで…そこの通りで出会った方々です、はい。
「でも他に良さげな方法が無いんですよ」

「そうよね～…」
　さとりに相槌を打った勝気な性格（個人の偏見）の彼女がカーバンクルのカームさん。って神獣じゃんこの人…人？
「面倒だが手が無い…か。どうしたもんかなぁ…？」
　と頭抱えてるのがケルベロスのケールさん。…やっぱ神獣じゃねーか!?
「「気づくのが遅い」」
「あっはいすいません」
「探さないで良いんですか…？」
「「良くはないけど…」」
　もっと効率あげらんないかなぁ…？
「なんか妖怪の溜まり場みたいなところ無いの？」
「「…あ」」
　そうだ、妖怪の山があるじゃないか。しかもこれから捜索予定。とすれば…
「行きましょうか」
「おう、なんか手がかりの１つでも見つかりゃいいが…」
　こうして、新たな仲間も加え、妖怪の山へ向かう俺達だった…。

「いやいい感じに終わらせようとしないでください」
「だって字数が…」
「メタはやめろと言っているサル!!」
「「?」」
「なんか言わなきゃいけない気がした」キリッ
「「はぁ…」」

# 第７話　花さか橋姫　中編２

～朝日ｓｉｄｅ～

―妖怪の山。

異常に広大なネ実市内で何故か唯一の山であり、ネ実市の南西部に位置する文字通り妖怪達の住処であるこの山は、陰陽鉄学園の生徒児童が一人暮らしする拠点にしていたり、山の中だけでも独自の経済が回っていたりする地域である。

我々調査隊は、その巨大な山に捜索に入るのであった…。

「ていっ」

「いった!?何すんだよ!?」

「巫山戯た思考が見えたのでつい」

「俺は心中まで存在を否定されるのか…」

「そうですね（キッパリ）」

「グサッ」

「まだやってる…」

「仲がいいのはわかったから早く案内してくれない?」

「「あっはい」」

なんだろう生き方を否定された気分。

「あーっ！温泉のおねーちゃんと変なおにーちゃんだー！」

「へっ…!?」

「え？」

そう声をかけてきたのは、学園の近くに建ってるファイナル幼稚園に通う妖精、エタニティラルバ。

…俺園児からも変な人扱いされるのか…どこが変だって言うんだよ…。

「全部だよ」

「えぇ!?ここにも悟り妖怪が!?」

「声にでてたよー？」

「わかりやすいにも程があると思っていましたが、そうでもないんですね、勉強になります」

「それ絶対わざとだよな!?」

「はい」

「即答!?」

「おにーちゃんたちなにしにいくのー？」

「それはね…」
「捜索そっちのけで夫婦喧嘩してる組と途中参加なのに園児に詳しい説明ができるカーバンクルとの温度差は何なんだ…」
「「夫婦!?」」
「なんでもいいから真面目に探そうとは思わないのか君ら…」
　夫婦発言は大問題ですよ!?何言ってんのこの犬!?
「…ってことなんだ」
「へぇー、じゃあママに聞いてみる？」
「「「ママ？」」」
　待ってラルバって妖精だよな？妖精なのに親が…？
「うーん…とりあえず会ってみる？」
「そうだな、当事者たちがこのざまだし」
「「馬鹿にされた気がする」」
「そりゃしたもん」
「置いてくよー？」
「「ちょ!?」」
　待ってくれんのかい!?

～さとりｓｉｄｅ～

「…んでうちさ来たわけか」

ラルバちゃんに案内された先にいたのは、山でも人嫌いで有名な坂田ネムノさんでした。ちなみに情報源は住人の心を読みました（キリッ）。

「ご迷惑をお掛けします…」

「…まぁえぇが。ラルバが連れてきよったやっちゃけぇの」

「ではあまり時間をかけるわけにもいきませんので早速…」

「その前に」

「「？」」

「あれほっといていいのけ？」

「あれ…？」

「よぉーし行くぞー！」

「それいけー！」

「…ほっときましょう。別にいなくても問題無いので」

楽しそうですしね。本来の目的も忘れて。
「あわれ言い出しっぺ」
「あいつ何がしたかったんだよ…」
「ええんなら構わんが…」
ラルバちゃんが楽しそうなので良しとします。あとで報告しますが。
「おめぇらの聞きてぇこたァだいたい分かる。通り魔のこったろ？」
「あぁ、結構自信あった攻撃が通用しなかったからな…。山の連中なら１人くらい原因に心当たりのある奴がいてもおかしくないと思ってな」
「何しにきたんですか帰れ」
「そろそろメンタルの限界が…」
何か言っているようですが無視無視。
「ちょっと待った。よくよく考えたら俺達その通り魔について何も知らないんだが…」
「えっ」
「「えっ」」
「…大丈夫なんか？こんなんで…」
～少年少女説明中～
「…なるほどねぇ」

「「どうにかなりませんか？」」
「無理じゃね？」
「そんなぁ…」
「私達では手に負えない…と？」
「純粋な妖怪ってのはおめぇらがそう簡単に傷つけられるほどやわじゃねぇけの」
「悟り妖怪の貴女でも決定打は無いわ」
「…悪いこたぁ言わねぇべ。手ェ引いときな」
　諦めたくない…ですが、諦めるしかないのでしょうか…。
「…やだね」
「「「！」」」
「さんざん馬鹿にされた挙句、呼吸するかのように殺生をし、悠々と逃げ回ってるやつを…あいつらが奮闘しているこの事態を、俺は諦めるようなことはしない」
　朝日さん…。
「ここで逃げて…また『あんなこと』になるくらいなら俺は死ぬ気ででも戦う」
「…そうけぇ。そこまで言うんなら好きにしな」
「…あぁ、やってやｒ」（ｐｒｒｒｒ
「「「？」」」

携帯のコール音…？
「あ、悪い俺の携帯だ…どうした？」
『現在位置から北東方向７５０ｍにて、それらしき反応を確認しました』
「わかった、用件が済み次第急行する。周辺警備を怠るな」
『了解』
「何かあったの？」
「エキビョウっぽい反応があったそうだ」
「…！」
ついに…見つかった？
「おめぇらの仲間もくっかもしんねぇべ。そったらなんか変わっかも知んねぇなぁ。今決めた覚悟、忘れんな？」
「…ｈａｉ！」
そう言うや否や、朝日は駆け出した…って待ってー！
「置いてかないでくださぁぁぁぁい！」

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

「…良いのか？何も解決したように見えなかったが…」

「あぁいうのは気持ちの問題だべ」
「要は気持ちの問題…ですか？」
「んだ。うちができるのはこんだけだべ。後は知らん」
「じゃあ俺達は見届けてみるとしますか」
「そうね。とりあえず追いかけましょ？余裕で追いつけるでしょ？」
「誰に聞いてんだ？当たり前だ」
「…気ぃつけれな」
「えぇ。お世話になりました」

～大雅ｓｉｄｅ～

結局収穫の無いまま、帰宅しようということになり、俺達はメインストリートを歩いていた。
「あら」
「どうした？」
「珍しい場所で珍しい組み合わせを見つけたわ」
そう言ってパルスィが指さした先には、笠松と四季生徒会長がいた。
「げ、生徒会長いるぜｗ何言われっか分かったもんじゃねえし、ほっとこうぜｗ」

「珍しい組み合わせじゃない、逢引か何か？」
「んなわけあっかよ」
「私達は同じ生徒会役員、一緒にいてもどこもおかしくはありませんし、それは水橋さんもでは？」
「忍者が私生活で個人的に会ってるところならあまり見ないわ」
「水橋さんはストーカーか何かですか^　^　;」
「ただの偶然だっての…買い物に来るのは至って普通だし、俺にとっちゃこっちは帰り道だからな」
「ふうん…」
　パルスィさん半信半疑のご様子。まぁ無理もない。
「お前らはｗなｗしｗきｗけｗ」
「ハイハイ後でな」
「おいｗｗｗ」
　餡刻が何か言ってるが重要でもなさそうなのでスルー。
「聞きましたよ、独自に通り魔事件の調査をしているそうですね」
　げ、よりによって１番バレたらまずい人にバレてた。絶対お説教ルートだよなぁ…。
「えぇ、お小言を言うつもりでしたよ」

「会長って悟り妖怪だったの!?」
「貴方が特別わかりやすいだけです。…捜査の途中でパルスィさんの愛犬が亡くなったとか」
「……まぁ、ね」
「陰陽鉄学園の一生徒として、そして一人の人間として。あなた達だけにこの件を任せようと決断できるほど私は完成された人間ではありません」
「だからって止まる気は無いぜ?」
「言うと思いましたよ…全く、同じ危険なら、まだ協力した方がましだというものでしょう。絶対に複数人で行動すること。分かっていますか?」
「言われるまでもない…あんたはどうすんの?」
「あ?俺か?」
「忍者にまで協力させる気かよｗｗｗあいつが動くとは思えねぇｗｗｗ」
…言われてみれば、確かに何かと理由をつけて断りそうだが、そんなことないだろ。きっと。
「最善手を尽くすつもりだから、人手は多いに越したことはないのよ。ちなみに学園の先生には軒並み伝えてあるから」
いつの間に…。

「はぁ～…。お前らと絡むとこれでもかってくらい厄介事持ってきてくれるよなぁ…ったくわかりましたよー手伝いますよはいはい」
「ウッソだろおいｗｗｗ」
　けっこうあっさり手伝ってくれるようだ。
　ａｎｋｏｋｕ「どういう腹積もりだよお前」
　ｎｉｎｊａ「死んだシロな…昔はよく一緒に遊んでたからよ」
　ａｎｋｏｋｕ「らしくねぇな」
　ｎｉｎｊａ「うるせぇ」
「…とはいえ、今日はもう捜索は厳しい時間だが…」
　実際、今６時をまわっているため、明日も学校の身には捜索に費やせる時間がないわけで…。
「私達も結局帰宅途中だったものね」
「仕方ありませんね。捜索は明日からということで…」（ｐｒｒｒｒ
　突然携帯のコール音が辺りに響いた。
「…？誰のだ？」
「あ、私ね。もしもし？」
『水橋先輩ですか？ナズーリンです』

「何かあったの？」
『先程、うちのネズミが一匹、消息を絶ちました』
「…！」
『座標を送りますので、そちらに向かってください』
「分かったわ。それじゃ、向こうで落ち合いましょう」
『くれぐれもお気を付けて』
「えぇ」
　どうやら、協力者かららしい。
「なんて？」
「それっぽいのがいたらしいわ。場所はあっち」
　そう言ってパルスィが指さしたのは、妖怪の山だった。
「なるほど、居てもおかしくないところですね」
「あっちは確か…朝日たちが行ってなかったか？」
「丁度いいわ、連絡して合流しましょう」
「ＯＫ。電話しとく」
　俺達５人は妖怪の山へ向けて駆け出した…。